

# 華嚴教学における願行について

——法藏の所説を中心に——

## 一 色 順 心

『華嚴經』六十卷（東晋仏跋跋陀羅訳）は、七処八会三十四品によって構成されているが、大乘菩薩道を説く多くの經典がある中でこの經は何をねらいとし如何なる緣由によって説かれたのか。唐代にあつて『華嚴經』を所依の經典とし、『華嚴五教章』三卷、『華嚴經旨帰』一卷、

『華嚴經文義綱目』一卷、『華嚴三寶章』二卷、『華嚴經探玄記』二十卷など多くの著述によって中国華嚴教学の代表者の一人とされる法藏（643-712）は、『華嚴經』興起の因縁を、如来の願力や菩薩道および無礙の教説との関わりにおいて、この經典の旨趣を示すと思われる幅広い經文を掲げつつ、自身の所論を展開していると考えられる。そこで、本稿においては、『華嚴經』の註釈書であつて法藏の主著とも言うべき『探玄記』を手掛かりにして、彼の華嚴經觀の一端を、菩薩の願行という面に焦点

をあてて考察してみたいのである。その場合、『探玄記』卷一の玄談部分の中で「教起の所由」すなわち『華嚴經』が興起された緣由の内容を検討し、次に十地品の初歡喜地における菩薩の修行道を法藏がどのようなものとして积しているのかを考えていきたいと思うのである。

## 一

法藏は、教起の所由を述べるさいに先ず、総説<sup>①</sup>するに、華嚴「大教の興る因縁は無量」であるとし、「少因縁をもつて等正覚を成じて世に出興したまうに非ずして、十種無量無数百千阿僧祇の因縁を以て世に出興したまう」<sup>②</sup>（『華嚴經』卷三三、性起品）ものであり、その因縁の第一には如来が無量の菩提心を發して一切の衆生を捨てたまうことはない。それ故にこの經が興出されたというので

ある。『探玄記』卷一に示される「教起の所由」は、その総説をうけて各別に、所由の十義を提することにより、無尽なることを明かすものであるとし、「法爾の故に、願力の故に、機感の故に、為本の故に、顕徳の故に、顯位の故に、開發の故に、見聞の故に、成行の故に、得果の故に」の十種の所由が詳説されるのである。一切諸仏は法爾としてみな無尽の世界において無尽の法輪を転じたまうものであり、停まることも息むこともなく未來際を尽窮する。時と處の両面にわたって無尽無尽を表す『華嚴經』における諸仏の法が自然にそのようにしてあるがゆえに第一に「法爾の故に」というのである。

法蔵は『華嚴經』興起の第二の縁由として、「願力の故に」を挙げて、如来の願力があるからこそ、その教法が衆生の機に称って顕現せしめられるとし、『探玄記』卷一に次のごとく述べている。

盧舍那品云、十方国土中一切世界海、仏願力自在普現<sup>④</sup>轉法輪<sup>⑤</sup>。又云、盧舍那仏神力故一切刹中轉法輪普賢菩薩願音声遍滿一切世界海。解云、即是此經該<sup>⑥</sup>於十方虛空法界等一切世界<sup>⑦</sup>及諸塵内諸刹土中同時說<sup>⑧</sup>此經<sup>⑨</sup>者、皆是本師願力所致。是故下諸會初皆云<sup>⑩</sup>盧舍那仏本願力故<sup>⑪</sup>。又雲集品頌云。無量無

數劫此法甚難<sup>⑫</sup>值若有<sup>⑬</sup>得<sup>⑭</sup>聞者<sup>⑮</sup>當<sup>⑯</sup>知<sup>⑰</sup>本願力。解云、此即由<sup>⑱</sup>仏願力<sup>⑲</sup>令<sup>⑳</sup>衆得<sup>㉑</sup>聞。又云、如来不<sup>㉒</sup>出<sup>㉓</sup>世<sup>㉔</sup>亦無<sup>㉕</sup>有<sup>㉖</sup>涅槃<sup>㉗</sup>、以<sup>㉘</sup>本大願力<sup>㉙</sup>顯<sup>㉚</sup>現<sup>㉛</sup>自在法<sup>㉜</sup>。

(大正35・一〇八a-b)

十方国土の一切世界に仏が自在に法輪を転じたまうのは願力によってであり、その願力は、盧舍那仏の願力、神力を意味する。その盧舍那の神力をうけて普賢菩薩の願の音声が一切世界に遍滿する。法蔵は、この盧舍那仏品の文を解釈して、華嚴經に十方の虚空界に等しい一切世界を該攝すること、および諸の塵内の諸の刹土の中に同時にこの經を説くことは、みな本師盧舍那仏の願力によってであることを明すのである。また、經説に依るに、如来は出世することもなくまた涅槃もあることはないのであって、本の大願力を以て自在の法を顕現するのである。その法は衆生にとって甚だ値い難く、もしその法を聞くことを得たとすれば、聞思し得た衆生の側でなく、まさに仏の本願力に依つてのことだということを知るべきであるとする。このことは『華嚴經文義綱目』<sup>⑧</sup>にも略述があつて、「初に願力の故にとは、謂く仏と菩薩と及び彼の機縁との三位は願力の所起なり。故に下の文に云く、盧舍那仏の願力の故に、普賢の願力の故に、と。」

『文義綱目』とある。仏といい、菩薩といい、彼の機縁としての衆生といっても、それらの三位はいずれも願力の所起である。「盧舎那仏の神力」と「普賢菩薩の願の音声」、「盧舎那仏の願力」と「普賢の願力」と表現されて、盧舎那と普賢との別があるように説かれてはいるが、言わんとするところは、その二の別ということではなくて、願力ということに他ならない。自在の教法を機に称って顯現せしめる用きは、あくまでも盧舎那仏の願力、神力、普賢菩薩の願に帰せられていることが窺えるのである。

『華嚴經』興起の緣由という点において、衆生の機と如来の教法とはどのような関係にあるのだろうか。先述の經説によれば、如来が自在の教法を顯現せしめるのは、本の大願力を以てのことであり、如来自身には出世も涅槃もあるわけではないとされた。もし、如来に出世や涅槃があるとすれば、如来に生滅があることになってしまう。逆に、出世も涅槃も無きことによって如来の無生滅なることが明らかにされ、無生滅でありつつ、しかも如来は大願力を以て自在の法を顯現するのである。その自在の教法は衆生の機と関わって説法が成り立ち、また法と機との本末の関係などが、第三と第四の緣由において

示される。すなわち、「三に機感の故にとは、如来は平等にして改易有ること無きも衆生に隨應して身を現じて法を説く。」(『探玄記』卷二)<sup>⑨</sup>とあるように、平等にして改易なき如来に現身説法があるのは、如来の教法を感受するところの衆生の機があるから、それに隨應してのことなのである。また「四に為本の故にとは、謂くまさに機を逐うて漸く末教を施さんと欲せんとするが故に、宜しく最初に先ず本法を示して、後に此に依りてまさに末を起すことを明かすが故に。」(『探玄記』卷二)<sup>⑩</sup>とある。

枝末の法輪たる逐機の末教を説こうとするその根本に、まず本教たる『華嚴經』を説くということが明らかにされている。如来の教法が遍く衆生の機にゆきわたるには、譬えば日出でて先ず高山を照らすのごとく、逐機の末教に先立って『華嚴經』の教法が本教となるのである。それ故に『華嚴經』を為本の故にするのである。

では菩薩の修行道と『華嚴經』興起の緣由とはどのように関わるのか。法蔵所説の「教起の所由」自身にそのような意図があったのかどうかは定かではないが、菩薩の修行道の在り方について示唆に富む記述が多出すると考えられる箇所は、第五の「顯徳の故に」より第十の「得果の故に」であると思われる。まず「第五に顯徳の

故にとは、謂く仏果殊勝の徳を顕して諸菩薩をして信向し証得せしむ。』（『探玄記』卷一<sup>12</sup>）とある。つまり、依正無礙の仏果の徳を顕さんがために『華嚴經』が興起されたということを表すのであり、依果（蓮華藏莊嚴世界海と正果（如来の十身）との二果無礙の構造が、盧舍那仏品の文を例証としつつ分析されている。諸菩薩に信向・証得への修行道が可能になるのは、依正無礙の果徳に依るということが明らかにされるのである。前が依正無礙であったのに対して、次の第六「顕位の故に」では、菩薩の修行位として、行布と円融の二門があつてその二無礙の位を顕そうとなすのである。次の第七と第八とは、主に性起品に依つて、經の興起の所由を明かそうとする。すなわち第七の「開發の故に」では衆生心中の如来之藏性起之功德を開發せしめんとす。如来の性徳を諸菩薩に開發させ、修學して無明を破せしめんとするのである。第八の「見聞の故に」では無尽自在の法門を衆生に見聞せしめようとする。その法門とは、ただ極位の大菩薩のみの境地であるというのである。第十の「得果の故に」では、普賢菩薩行品や仏小相光明功德品および不思議法品を例証として、仏地の智果・断果の二果を得させんとする。そして、除障としての断果には、一障一切障、一

断一切断なること、対して成徳としての智果には、逆順自在、依正無礙なることが示されるのである。

では、菩薩が修すべき行とは何か。これについて第八の「成行の故に」には、『華嚴經』は、諸菩薩に普賢行を成ぜしめんとして興起されたという。『探玄記』卷一に、

九成行故者、謂為示此普法<sup>13</sup>。今諸菩薩成普賢行、一行即一切行、初発心時便成正覺、具足慧身、不由他悟<sup>14</sup>。又云、菩薩受持此法、少作方便、疾得阿耨多羅三藐三菩提等。此亦二種、一頓成、多行、二遍成、普行、竝如三下説。（大正35・一〇八c）

と説かれるように、華嚴の普法を示すことによつて諸菩薩に普賢行を成ぜしめ、一行即一切行ならしめようとするものであり、その行は、「頓に多行を成ずる」という円融の面と、「遍く普行を成ずる」という行布の面をもつ二行なのである。菩薩の修行道は、普賢行を成就させること、および一行即一切行なることの体得にあるとされるが、これを「行」に対する「位」という観点に立つとき、第六の「顕位の故に」では行布と円融の二位に分けて説示されている。すなわち、「一には次第行布門なり。謂く十信十解十行十迴向十地を満じて後、まさに仏果に至る、微より著に至り位は漸次なり。二には円融相

撰門なり。謂く一位中に即ち一切の前後の諸位を撰す、是の故に一一の位満するとき皆、仏地に至る。此の二は無礙なり。」(『探玄記』卷二)<sup>15</sup> というのである。漸次に修行位を経ていく次第行布に対して、修行の一位が満ずれば一切の諸位を撰して仏地に至る円融相撰がある。「一行即一切行」「初発心時便成正覺」「疾得阿耨多羅三藐三菩提」などと説かれる華嚴の修行道は、円融相撰ということによって明らかになるものであるといえよう。しかも行布と円融の二門が各別に独立してあるというのではなくて、二門無礙なることをもって『華嚴經』の指し示す修行位を捉えようとする。このことは法蔵の『文義綱目』においては「信等の六位は円融し前後を相撰す、是の故に一位即一切位なり。而も前後は歴然たり」と解釈されている。華嚴の修行道は、前後の諸位を相撰しつつ而もその諸位は歴然たる構造をもつものであり、円融相撰しつつ次第行布の諸位は歴然としている、無礙の立場にたつものであることが明らかになるのである。

## 二

法蔵によれば、『華嚴經』が興起された因縁は無量であつて略説せば十種の所由ということになり、中でもこ

の經は如来および普賢の願力を説き、普賢行を明かす經典であることが知られた。『華嚴經』自身の中で、願行がしばしば説示されるのは、淨行品において智首菩薩が願行を問うたのに対して文殊菩薩が願行を掲げて答える箇所や十地品の初歡喜地における菩薩の十大願、離世間品に「十種普賢願行法」<sup>16</sup>を挙げてゐる箇所などに見ることができ。しかし、前掲の「願力の故に」において法蔵が「是の故に下の諸会の初に皆、盧舍那仏の本願力の故にと云えり」と指摘しているように、本願力<sup>17</sup>ということは、『華嚴經』の七処八会を貫いているものであると言えよう。では、菩薩の願とは如何なるものであろうか。法蔵は、『探玄記』卷四の淨行品釈において、淨行品の宗趣を「願海を以て宗と為す」ものであるとし、願に四種を挙げる。すなわち、

但願有<sup>18</sup>四種。一誓願、謂行前要期等、二行願、此有<sup>19</sup>三種、一与<sup>20</sup>行俱起、二但对<sup>21</sup>事發<sup>22</sup>願、則此是行以<sup>23</sup>防<sup>24</sup>心不<sup>25</sup>散故、三行後願、謂以<sup>26</sup>行迴向願<sup>27</sup>得<sup>28</sup>菩提<sup>29</sup>等、四自体無礙願、謂大願究竟同<sup>30</sup>法性海<sup>31</sup>、任運成<sup>32</sup>弁一切諸事<sup>33</sup>。(大正35・一八四c)

とあり、願を行との関係において分析しつつ解釈している。法蔵の言わんとする願とは、大願が究竟して法性海

と同じ任運に一切の諸事を成弁するという第四自体無礙の願にあるといえようが、これは、智儼の『搜玄記』巻一下に所説の『自体無障礙の願』<sup>②</sup>を承けたものであろう。さらに、第二の「行願」において、願は行と俱に起るものと、ただ事に対して発願するものとの二種に分けて分析していることは、願が願にとどまらず行を伴うものであり、その願行は、菩薩に心の散乱を防ぐ用きをもつことが知られるのである。『華嚴三寶章』巻下に、「造修勝行」を説く中の第三門として、

三成行門者、一起六波羅蜜行（一一云云）二四無量行（一一云云）三十大願行（一一云云）願行有<sub>レ</sub>二、一諸未<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>行策令<sub>レ</sub>起、二已<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>行持令<sub>レ</sub>不退、皆由<sub>レ</sub>願力<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>法行<sub>レ</sub>也。（大正45・六二六a）

とあるように、菩薩の成行に、六波羅蜜行や四無量行の他に十大願行を掲げ、その願行には、諸の未起の行を策して起さしめるもの、また已起の行をして持して不退ならしめるものとの二義として述べられている。行に未起・已起の別を立てつつ、菩薩の願行の内容がこのように解釈されることによって、願は行を起こし、またその行を不退ならしめるものであることが明らかになるといえる。

菩薩の願行という課題は、十大願を説く十地品の初地が内包する問題であると考えられるため、以下に、法蔵の十地品釈を手掛かりにして、願行のもつ課題を一考することにした。

法蔵は『探玄記』巻九において『華嚴經』十地品の「品の宗趣」を、次のようにまとめている。

二品宗者、此品約<sub>レ</sub>總正以<sub>レ</sub>十地証行<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>宗、別説有<sub>レ</sub>三義。一約<sub>レ</sub>本唯是果海不可說性。二約<sub>レ</sub>所証<sub>レ</sub>是離垢真如。三約<sub>レ</sub>智謂根本後得等三智。四約<sub>レ</sub>斷謂離<sub>レ</sub>三障種現。五約<sub>レ</sub>所修<sub>レ</sub>初地修<sub>レ</sub>願行、二地戒行、三禪行、四道品行、五誦行、六緣生行、七菩提分行、八淨土行、九說法行、十受位行。六約<sub>レ</sub>修成<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>四行、謂初地信樂行、二戒行、三定行、四已上總是慧行。（大正35・二七七b）

すなわち、十地品は、総じては十地の証行を宗趣とするものであり、別して説けば十種の意義をもち、そのうち、菩薩の修行道としての「所修」や「修成」という観点に立てば、初歡喜地は「願行を修するもの」「信樂行」を明かすものとして位置づけられていることがわかる。そこで、十地品の初歡喜地の内容を、菩薩の願行および信樂行ということで捉えていること、とくに初地の中の

説分に説かれる菩薩の十大願に至る、菩薩の願行を『探玄記』の十地品はどのようなものとして捉えているのだろうか。

初歡喜地の部分の分科については、『探玄記』巻九に法藏自身、「二に文を解すとは、初地に八分あり、文処の分齊は論に準じて知るべし。」(大正<sup>35</sup>・二七八c)と述べているとおり、彼は世親の『十地經論』<sup>②</sup>に準じて文脈を立てているが、ただし『十地經論』の第八分の「校量勝分」<sup>②</sup>の部分を、法藏は第七分である、金剛藏菩薩が十地の内容を説いた「説分」の中に含めており「願校量」「行校量」「果校量」という三つの観点に分けて解釈し、以下、長行と偈頌の部分に分けて經文を解釈するのである。従って、初歡喜地は、『探玄記』の分科によれば、「序分」「三昧分」「加分」「起分」「本分」「請分」「説分」というように次第する。第二分の「三昧分」において「仏の威神をうけて、菩薩大智慧光明三昧」<sup>③</sup>に入った金剛藏菩薩に対して、第三分である「加分」においては、十方世界の微塵数に等しき諸仏の名は、皆、金剛藏という同一の号であって、金剛藏菩薩に対して威神が加えられる。何故にこの菩薩に威神力が加えられたのか。經文には、

所謂盧舍那仏本願力故、本威神力故、汝有大智慧故、欲宣一切菩薩不可思議諸仏法明故。

(大正9・五四二b)

とあって、金剛藏菩薩に加えられた威神力は、盧舍那仏の本願力や本の威神力によるからであり、この菩薩自身には大智慧が具わっており、またこの菩薩自身が、不可思議諸仏の法を宣説せんとする菩薩に他ならないからであるというのである。また、諸仏の名が金剛藏という同一の号であって異名ならざる、その理由の一つとして法藏は、盧舍那仏に約して『探玄記』巻九に、

二約<sup>④</sup>盧舍那仏<sup>⑤</sup>。謂<sup>⑥</sup>舍那本行菩薩行<sup>⑦</sup>時、見<sup>⑧</sup>下一舍那仏所能加諸仏同名<sup>⑨</sup>金剛<sup>⑩</sup>加説<sup>⑪</sup>地法<sup>⑫</sup>、舍那今成<sup>⑬</sup>正覺<sup>⑭</sup>、本願今成故彼能加仏亦名<sup>⑮</sup>金剛<sup>⑯</sup>。故云<sup>⑰</sup>不二異名<sup>⑱</sup>也。

(大正35・二八〇c)

と解釈している。盧舍那仏がもと菩薩の行を行じていた時、能加の諸仏も同一に金剛藏と名づけられており、十地の法を説かせしめたことを見たのであるから、その場合と同じく、加をなした諸仏も同一に金剛藏と名づける。それ故に、異名な菩薩に対する加ではないとするのである。

次に、初地の經文の中で「本分」において、菩薩大智

慧光明三昧から起った金剛藏菩薩が諸菩薩たちに対して、「諸菩薩たちの願が決定した」こと、および「十地の名」を説示する。その経文には、

諸仏子、是諸菩薩願決定。無有<sub>レ</sub>過、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>壞、  
广大如<sub>ニ</sub>法界<sub>ニ</sub>究竟如<sub>ニ</sub>虚空<sub>ニ</sub>、遍覆<sub>ニ</sub>一切十方諸仏世界  
衆生<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>救<sub>ニ</sub>度<sub>ニ</sub>一切世間<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>一切諸仏神力所<sub>レ</sub>護。

何以故。諸菩薩摩訶薩入<sub>ニ</sub>過去諸仏智地<sub>一</sub>、亦入<sub>ニ</sub>未來  
現在諸仏智地<sub>一</sub>。何等<sub>ニ</sub>是諸菩薩摩訶薩智地<sub>一</sub>。菩薩摩訶  
薩智地有<sub>レ</sub>十。  
(大正9・五四二c)

とある。経文の「本分」のここの箇所を、法藏は『十地  
經論』の所説をうけて、「願の六決定」をさすものである  
とし、「此の六決定」は「地の体」をなすもの、その  
あとに説示される「十地の名」は「地の相」を表すもの、  
そして、過去・現在・未來の三世にわたって同じく説か  
れるものであることは「地の要勝」を明かすものである  
と解釈する。三昧より起った金剛藏菩薩が諸菩薩に示し  
たこの部分は「本分」と名づけられたように、十地の根  
本を表すものであり、願の六決定が「十地の体」をなす  
ものであるという位置づけによれば、菩薩十地の根本と  
なるものは、願の決定ということにある。この点を法藏  
自ら「十地の体性差別を論ずる」十門の第一門に、「一

には此の六決定を以て体と為す、此れは正しくこれ所説  
の十地の本体なるを以ての故なり」と述べていることに  
よっても知ることができるのである。その「願の六決  
定」は、『十地經論』卷一に、「願善決定」として、

願善決定者、如<sub>ニ</sub>初地中説<sub>ニ</sub>發菩提心<sub>一</sub>、即此本分中  
願<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>知。善決定者、真實智<sub>レ</sub>撰故。善決定者、即是  
善決定。此已入<sub>ニ</sub>初地<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>信地所<sub>レ</sub>撰。此善決定有<sub>ニ</sub>  
六種<sub>一</sub>。  
(大正26・一二六c)

と説かれ、以下、六種の善決定である「觀相善決定」「真  
實善決定」「勝善決定」「因善決定」「大善決定」「不怯弱  
善決定」が示されている。六決定に相当する経文は、  
『華嚴經』十地品と『十地經論』の経文とでは少しく異  
同が見いだされるのであるが、法藏は、『探玄記』の中  
で、前掲の『十地經論』の所説を受けて、十地品のその  
相当箇所を次のように解釈している。

初句此総。菩薩願者標<sub>ニ</sub>人別<sub>一</sub>法。於<sub>ニ</sub>大菩提<sub>一</sub>立<sub>レ</sub>  
誓趣求名<sub>ニ</sub>發菩提心<sub>一</sub>。亦則是願、故会釈願<sub>レ</sub>同、簡<sub>ニ</sub>  
地前願<sub>一</sub>。故云<sub>ニ</sub>決定<sub>一</sub>。決定則是証智真實。是故決定則  
是善。善即是決定。故云<sub>ニ</sub>善決定者則是決定<sub>一</sub>。

(大正35・二八六c)

十地品の初歡喜地の経文の中には、説分に相当する箇



所に、「かくの如き衆生は、すなわち能く阿耨多羅三藐三菩提心を発さん。」(説分) というように、発菩提心がしばしば説かれているが、「大菩提に於いて誓を立ててそこに趣求する」用きを「発菩提心」と名づけるのであり、それはすなわち願を意味するといえる。「菩薩の願」は、発菩提心を根本となすものであり、「願の善決定が真実智の摂」であり、願の「決定とは則ち証智真実」であると解釈されることによって、菩薩の願が大菩提の真実智を根本とするものであること、また、願の「決定」と述べられるところに、十地以前に説かれた願との区別が示されていることが指摘されているのである。

先の「本分」では、十地の体をなす「願の六決定」および「十地の名前」のみが説かれたのに対して、「説分」では、初歡喜地の内容が説かれるにいたる。法蔵は、この章が説分と名づけられるのは、「十地の差別を演暢し宣陳するためである」とし、また、説分を説く「意趣」については、『探玄記』巻九に、

三説意者、前本請分中已説<sub>レ</sub>地体、令<sub>レ</sub>彼上機悟<sub>レ</sub>解玄旨、今弁<sub>レ</sub>地相、令<sub>レ</sub>中下之流隨<sub>レ</sub>相開解、故明<sub>レ</sub>説也。又前已略示<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>正解、今更広陳<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>修行、故明<sub>レ</sub>説也。

(大正35・三〇〇a)

と示している。先の第五の「請分」に地の体が示されたのに対して、次の第六の「説分」においては地の相が説かれる。正しく初歡喜地の内容を広く説くことにより、菩薩に行修を起こさしめるために説かれるものであることがここに明らかにされている。説分の經文の長行の部分の解釈では、經文が四つの文脈に区切られて「一は始住地分、二は地の積名分、三は安住地分、四は校量勝分」と名づけられている。その中の第一の始住地分に相當する經文を、法蔵は『十地經論』の分科によりつつ、『探玄記』巻九に、

前中有<sub>レ</sub>四、一始住地分、二地積名分、三安住地分、四校量勝分。就<sub>レ</sub>初分中論主分為<sub>レ</sub>四。一依<sub>レ</sub>何身<sub>レ</sub>者、謂厚集<sub>レ</sub>善根<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>所依身。二為<sub>レ</sub>何義<sub>レ</sub>者、為<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>三果。三以<sub>レ</sub>何因<sub>レ</sub>者、以<sub>レ</sub>大悲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>因。四有<sub>レ</sub>何相<sub>レ</sub>者、過<sub>レ</sub>凡得<sub>レ</sub>聖為<sub>レ</sub>相。此四各有<sub>レ</sub>十門、別弁<sub>レ</sub>名為<sub>レ</sub>創住<sub>レ</sub>菩薩初地。

(大正35・三〇一b)

と、四つに分けて各々を解釈する。中でも第三の「何の因を以てなりや」の箇所相當する經文には、

諸仏子。是心以<sub>レ</sub>大悲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>首、智慧増上、方便所<sub>レ</sub>護、直心深心淳至、量同<sub>レ</sub>仏力、善決<sub>レ</sub>定衆生力<sub>レ</sub>仏力、趣<sub>レ</sub>向無礙智、隨<sub>レ</sub>順自然智、能受<sub>レ</sub>一切仏法、

以智慧教化、廣大如法界、究竟如虛空、尽未來際。  
(大正9・五四四c)

と説かれている。どういう因をもってこのような菩提心を生ずるのかといえば、菩提心は「大悲をもって首」となすことが示されている。前の第三の「何の義のためなりや」では求められるべき仏果が示されたのに対して、ここでは能成の因の問題が明されるのである。法蔵はこの因ということについて、『探玄記』巻十に、

謂以何因求大菩提、以大悲為首濟衆生二故。  
求此菩提一非為自安。何以故。若非如是是大菩提  
法無以究竟救衆生二故。是故諸行大悲為首。

(大正35・三〇二b)

と述べて、菩薩が大菩提を求めようとする因は、大悲を首となして衆生を濟度することにあるのであり、けつして、自らを安んぜしめたり自己の利益を得るために菩提を求めようとするのではない。畢竟して、衆生を救うということとは、この大菩提の法によってでなければならぬいからであり、菩薩の諸々の行は大悲を首となすことが明らかにされている。

以下、説分の中の第四分は校量勝分であり、そこにおける法蔵の解釈に、『然も此の勝相は略説するに三種有

り。願とはこれ志の遡広なることを標し、行とはこれ誓に依つて造修し、果とはこれ当位の行成就す。」とあるように三種の勝相として略説されたうえで、彼は、梁の『撰大乘論』に依つて、十大願それぞれの名前を出し、さらに、十願を自利・利他の問題として解釈していくのである。

菩薩の願行の内容が明らかになるためには、十地品に説かれる菩薩の十大願、および法蔵の十大願釈を吟味してみなければならぬのであるが、本稿では、願校量に至る以前の、法蔵の『探玄記』における初歡喜地積の前半部分を取り上げることに、菩薩の願行の意義について述べてきた。『探玄記』における法蔵の解釈を通して、初地の課題が菩薩の願行、信樂行にあること、加分における金剛藏菩薩への加被力が盧舍那仏の本願力によるものであり「異名ならざるものである」ということ、また本分に説かれる願の六決定は十地の体をなすものであり菩薩の願が発菩提心を根本となすものであること、また、説分の始住地分を通して、大菩提を求める菩薩の能成の因は「大悲を以て首となす」ことにあることが明らかとなるのである。また、『華嚴經』が興起された因縁の中に「願力の故に」「成行の故に」という所由が示

されて、盧舍那仏の願力によって菩薩の修行道が促されているのであり、これによっても『華嚴經』が菩薩に願行道を歩ませしめんとするものであることが窺えるといえるのである。

# 註

- ① 『華嚴經探玄記』卷一「初教起所由」、大正35・一〇七b。ここにおいて法蔵は、『大智度論』卷一（大正25・五七c）、『法華經』卷一、方便品（大正9・七a）、『華嚴經』卷三三、性起品（大正9・六一二b~c）の文を掲げつつ、教起の所由が少因縁によるものではなく大因縁によるものであることを総説している。
- ② 大正9・六一二b~c。
- ③ 教起の所由の十義は、『探玄記』卷一以外に、『華嚴經文義綱目』の「二明教興意」（大正35・四九三b~四a）に所出。その十義は「願力故、法爾故、為本故、為攝故、願徳故、願位故、開発故、見聞故、成行故、得果故」となっており、『探玄記』の十義とは配列および名目をやや異にしているが、内容はほぼ同じである。
- ④ 『華嚴經』卷三、盧舍那仏品、師子焰光普迅音菩薩の偈（大正9・四〇八a）。
- ⑤ 同右（大正9・四〇八a）。
- ⑥ 法蔵はこの文を「雲集品偈」としているが、『華嚴經』卷十、仏昇夜摩天宮自在品、無畏林菩薩の偈（大正9・四四六c）に相当する。
- ⑦ 『華嚴經』卷一四、兜率天宮菩薩雲集讃仏品、金剛幢菩薩

薩の偈（大正9・四八五c）。

- ⑧ 大正35・四九三c。
- ⑨ 大正35・一〇八b。
- ⑩ 同右。
- ⑪ 「日出先照高山」は、『華嚴經』卷三四、宝王如来性起品（大正9・六一六b）に所出。『探玄記』卷一「為本故」（大正35・一〇八b）にも引用。
- ⑫ 大正35・一〇八b。
- ⑬ 『華嚴經』卷八、梵行品「初発心時便成正覚、知一切法真実之性、具足慧身不二由他悟」（大正9・四四九c）の取意の文。
- ⑭ 『華嚴經』卷三三、普賢菩薩行品「菩薩摩訶薩得聞是法、以少方便疾得阿耨多羅三藐三菩提三世仏等」（大正9・六〇八a）の取意の文。
- ⑮ 大正35・一〇八c、「六願位故」の箇所。
- ⑯ 大正35・四九三c、「六願位故」の箇所。
- ⑰ 『華嚴經』卷三三、十地品の「菩薩如是安住歡喜地、發諸大願、生如是定心」（大正9・五四五a）以下、菩薩の十大願が説かれる。
- ⑱ 同右、卷三七、離世間品（大正9・六三五a）。
- ⑲ 『華嚴經』において「盧舍那仏本願力故」と説かれる箇所は、例えば、卷三、盧舍那仏品（大正9・四〇八b）、卷八、菩薩十住品（四四四c）、卷三六、性起品（六三〇c）、卷五二、入法界品（七二六b）、卷五六、入法界品（七五六b）などである。また、盧舍那と諸仏の願についての記述としては、卷五六、入法界品に「又復了知盧舍那仏初

發大願、乃至悉知十方諸仏發初大願、亦復如是」(七五三 c) などがある。

⑳ 『華嚴經搜玄記』卷一下、淨行品釈に「願有三種、一要期願、二行願、三自体無障礙願」(大正35・三〇c)とある。

㉑ 『十地經論』初歡喜地第一之一「十地法門、初地所攝八分、一序分、二三昧分、三加分、四起分、五本分、六請分、七説分、八校量勝分」(大正26・一二三b)

㉒ 『国訳一切經』經疏部八「華嚴經探玄記」九九頁、坂本幸男訳註(一) 参照。

㉓ 『華嚴經』卷二三、「爾時金剛藏菩薩摩訶薩、承仏威神、入菩薩大智慧光明三昧、即時十方世界、於一方過億仏土、微塵数世界、有十億仏土微塵数仏、皆現其身、名

金剛藏。」(大正9・五四二b)。

㉔ 『探玄記』卷九、「三釈文者、此文有三。初弁六決定、為地体、二列十名、顯地相、三挙三世間、同説明地要勝。」(大正35・二八六a)。

㉕ 同右(大正35・二八六b)。

㉖ 『十地經論』卷一、「諸仏子、是諸菩薩願善決定無雜不可見、廣大如法界、究竟如虚空、尽未来際覆護一切衆生界。仏子、是諸菩薩乃能入過去諸仏智地、乃能入未來諸仏智地、乃能入現在諸仏智地。」(大正26・二二六b c)。

㉗ 『探玄記』卷十(大正35・三〇〇a)。

㉘ 同右(大正35・三〇一b)。

㉙ 同右、卷十一(大正35・三〇六a)。